

(消化器内科)

近藤 由美

〔目的〕肝内胆管癌をCT所見上描出される形態から3型に分類し血管造影を含め臨床病理学的に対比し検討を行った。〔対象〕1985年から1992年までに切除または病理解剖を施行された肝内胆管癌43例を対象とした。〔結果〕1型は肝実質内に辺縁明瞭な腫瘍として認められた27例で、DCTでは辺縁の濃染像を認め、CECTでは内部が低吸収を示しdelayed scanにて辺縁部または内部に低吸収域がみられた。2型は肝門部近傍のグリソン鞘周囲に辺縁不明瞭な腫瘍を認めた13例でdelayed scanで腫瘍は濃染を示した。腫瘍から連続する拡大したグリソン鞘が認められ腫瘍の浸潤域に一致した。3型は拡張した肝内胆管内に不明瞭な隆起性病変を認めた4例で全例乳頭腺癌であった。1型、2型には血管造影、臨床像ともに特徴が認められた。

### 13. ラット closed duodenal loop (CDL) 膵炎における胆汁 diversion の及ぼす影響

(消化器内科)

西野 隆義

ラット CDL 膵炎における膵炎進展に及ぼす胆汁の役割を明らかにする目的で、胆汁 diversion の CDL 膵炎に及ぼす影響について検討した。Wistar 系雄性ラットを用い胆汁 diversion (BD) 群と CDL 群につき経時的に血清膵酵素値、腹水量、膵湿重量、腹腔内脂肪壊死、組織像を対比検討した。膵酵素の経時的変化では BD 群は CDL 群に比べ低値を示した。腹腔内脂肪壊死は、6時間後で BD 群で軽度であったが、12時間後以後両群に差はみられなかった。病理組織学的には、6時間後まで浮腫の程度は BD 群が CDL 群に比べて軽度であったが、12時間後以降、浮腫、出血、細胞壊死などは両群とも同程度の変化を示した。以上よりラット CDL 膵炎において、初期の浮腫性膵炎では胆汁 diversion により浮腫が軽減したが、出血性膵炎への進展には胆汁 diversion の影響が認められないことが示された。

### 14. 非定型慢性膵炎の形態と病因に関する研究—画像解析および免疫学的研究—

(消化器内科)

吉田 泉

〔目的〕特異な経過を呈した非定型慢性膵炎を画像、臨床および免疫学的に検討する。〔対象・方法〕対象は病理組織学的に慢性膵炎と確診した症例で、画像診断および免疫学的検討 (mixed lymphocyte reaction, リンパ球表面マーカー) を行った。〔結果〕非定型慢性膵炎は、飲酒歴に関連なく何らかの自己抗体と全例に高 $\gamma$ グロブリン血症を認めた。画像診断では50%に悪

性腫瘍が疑われ、膵癌との鑑別が困難であった。病理組織像では、リンパ球の浸潤が著明であった。mixed lymphocyte reaction では健常群、慢性膵炎群と比較し低下を、リンパ球表面マーカーでは活性化されたリンパ球の割合が増加していた。〔結論〕非定型慢性膵炎は自己免疫の関与が示唆された。

### 15. B 型慢性肝炎に対するインターフェロンの作用機序に関する考察—HBV 特異的キラーT細胞に対する効果に関して—

(消化器内科)

磯野 悦子

B 型肝炎に対するインターフェロン (IFN) の効果の機序を解明する目的で、HBs 抗原および HBc 抗原をコードする遺伝子導入細胞 (S6, C4) を標的細胞とし、 $\alpha$ -IFN 投与中の B 型慢性肝炎患者の末梢血リンパ球を分離し effector 細胞として細胞障害試験を行った。今回検討した症例中、INF 使用により、HBV 特異的 CTL 活性が低下するという事実は、1例を除き全症例で認められた。また、 $\alpha$ -IFN は、*in vitro* では HBV 特異的 CTL 活性を抑制しなかった。以上の結果より、B 型慢性肝炎に対する IFN の作用は、CTL に直接作用するのではなく、ウイルスの replication 等に作用し、間接的にキラー活性を抑制していると考えられた。

### 16. 肝細胞癌における PIVKA-II の臨床的意義—病態、予後に関連して—

(消化器内科)

安島 豊子

肝細胞癌 (HCC) の腫瘍マーカーである PIVKA-II は HCC に高い特異性が認められている。しかし、予後との関係に関する知見は極めて少なく、今回病態とも合わせ検討した。対象は1987年1月から88年1月の間に初めて受診した HCC 患者54例 (男42, 女12例) であった。〔結果〕① PIVKA-II 値は HCC 発見後生存日数と有意な負の相関を示し、PIVKA-II 陽性群は明らかに予後不良であった。また AFP は生存日数との相関が認められなかった。② HCC が被膜形成を示さない場合および門脈腫瘍塞栓を有する場合は、PIVKA-II の陽性率が有意に高くなり予後不良であった。このように、PIVKA-II は HCC の診断法としてのみでなく、病態の把握、予後の予測にも役立つ臨床的に有意な情報をもたらすことが判明した。

### 17. 肝細胞癌における PIVKA-II の産生機序に関する研究

(消化器内科)

山縣 英晴

肝細胞癌における特異的腫瘍マーカーである PIVKA-II の産生機序について実験的検討を行った。